

On the topology in Stein algebras

千葉大 教育 鷗 沢 正 勝

§1. 序

(X, \mathcal{A}) を Grauert [8] の意味の解析空間とし, X は可算位相をもつとする. \mathcal{F} を X 上の任意の連接解析層とすると, \mathcal{F} は Frechet 層となり, X 上の任意の開集合 W に対して, W 上の \mathcal{F} の切断の全体 $\Gamma(W, \mathcal{F})$ は Frechet 空間となる (定理1系). この位相は, X が reduced な場合と違って, CU 位相ではない. \mathbb{C} 上の位相環は, ある Stein 空間 (X, \mathcal{A}) があって, 位相環 $\Gamma(X, \mathcal{A})$ に同型であるとき, Stein algebra という. $X \subseteq \mathbb{C}^n$ の正則領域とし, $\Gamma(X, \mathcal{O})$ を X 上の正則関数全体とすると, Cartan 及び # 等は次のことを証明した.

1. $\mathcal{O} \in \Gamma(X, \mathcal{O})$ のイデアルとし, $\mathcal{O}\mathcal{O} \in \mathcal{O}$ から生成されるイデアルの層とすると, $\Gamma(X, \mathcal{O}\mathcal{O})$ は \mathcal{O} の閉包 $\bar{\mathcal{O}}$ に等しい [2].
2. \mathcal{O} がとくに有限生成的なら, $\mathcal{O} = \bar{\mathcal{O}}$ である [2].
3. $\mathcal{M} \in \Gamma(X, \mathcal{O})$ の極大イデアルとすると, 次の条件は同値である: (4). $\Gamma(X, \mathcal{O})/\mathcal{M} \simeq \mathbb{C}$. (5). \mathcal{M} は $\Gamma(X, \mathcal{O})$ の閉イデアル.

(v). 一点 $a \in X$ があり, $\mathcal{M} = \{f \in P(X, \mathcal{O}) \mid f(a) = 0\}$ [9].

この小論の目的は上の定理を一般の Stein 空間 (X, \mathcal{O}) 即ち Stein algebra にまで拡張することである (定理 2.3, 5). 更にこれらが Stein 加群にまで拡張されることを示す.

§ 2. Frechet 層

以下 (X, \mathcal{O}) と書いたら Grauert のいみの解析空間を表わし, (X, \mathcal{O}) と書いたら Serre のいみの解析空間 [11] を表わすとする. 又, 解析空間はすべて可算位相をもっているとする.

定義 1. 解析空間 (X, \mathcal{O}) は次の条件をみたすとす, Stein 空間という:

- (1). $\Gamma(X, \mathcal{O})$ は X の点を分離する.
- (2). X は正則凸.

Stein 空間に対しては次の基本定理が成りた → [8].

Cartan の定理 A, B. \mathcal{O} を Stein 空間 (X, \mathcal{O}) 上の連接層とすると,

- A. 各点 $x \in X$ に対して, $\Gamma(X, \mathcal{O})$ は \mathcal{O}_x 上 \mathcal{O}_x と生成する.
- B. $H^p(X, \mathcal{O}) = 0, p \geq 1$.

定義 2. \mathcal{O} を位相空間 X 上のベクトル空間の層とする. 次の条件を満足する開集合の近傍基 $\mathcal{U} = \{U\}$ が存在するとす, \mathcal{O} を Frechet 層という:

- (1). すべての $U \in \mathcal{U}$ に対して $\Gamma(U, \mathcal{O})$ は Frechet 空間の位相

が入る.

(2). $U, V \in \mathcal{U}$, $U \supset V$ なる制限写像 $r_{U,V}: \Gamma(U, \mathcal{O}_U) \rightarrow \Gamma(V, \mathcal{O}_V)$ は連続である.

定理1. $(X, \mathcal{A}) \in$ 解析空間とすると, すべての連接層に対して, 次の条件が成り立つように, Frechet の層の位相を一意的に入れることが出来る. 即ち任意の2つの連接層 \mathcal{F}, \mathcal{G} に対して, 近傍基 \mathcal{U} があって, すべての $U \in \mathcal{U}$ に対して $\Gamma(U, \mathcal{F}), \Gamma(U, \mathcal{G})$ は Frechet 空間であり, 任意の \mathcal{A} 準同型写像 $g: \mathcal{F} \rightarrow \mathcal{G}$ に対して, g により引きおこされた写像 $\Gamma(U, g): \Gamma(U, \mathcal{F}) \rightarrow \Gamma(U, \mathcal{G})$ は Frechet 空間の連接写像である [4, 5].

次の補題1はよく知られている.

補題1. $D \in \mathbb{C}^n$ の領域とすると, D 上の正則関数全体のなす環 $\Gamma(D, \mathcal{O})$ はコンパクト-確収束の位相で Frechet 空間となる. 従って任意の正整数 q に対して, $\Gamma(D, \mathcal{O}^q) \simeq \{\Gamma(D, \mathcal{O})\}^q$ も Frechet 空間となる.

補題2. $D \in \mathbb{C}^n$ の領域, \mathcal{U} を \mathcal{O}^q の (必ずしも連接ではない) 解析的部分層とすると, $\Gamma(D, \mathcal{U})$ は $\Gamma(D, \mathcal{O}^q)$ で閉じている. 従って $\Gamma(D, \mathcal{U})$ は Frechet 空間である [4].

証明. $f_{\nu} \in \Gamma(D, \mathcal{U})$ を $f_{\nu} \rightarrow f \in \Gamma(D, \mathcal{O}^q)$ なる点列とする. $w \in D$ に対して, \mathcal{U}_w は \mathcal{O}_w^q の部分層で, $f_{\nu, w} \in \mathcal{U}_w$. 故に命題の局所用性定理 [2] によつて, $f_{\nu, w} \in \mathcal{U}_w$ となる. 従つて $f \in \Gamma(D, \mathcal{U})$.

定理の証明 $x \in X$ とすると, x の近傍 U_x と, U_x からある \mathcal{O}^k の多重円板 $(\Delta(0; r), \mathcal{O})$ の閉解析部分空間 (V, \mathcal{O}') への同型写像とがある. ここに \mathcal{O}' は \mathcal{O} のあるイデアルの連接層 \mathcal{O}' をとって $V = \text{supp}(\mathcal{O}'), \mathcal{O}' = \mathcal{O}'|_V$ とかける. このような複素空間 (V, \mathcal{O}') を (U_x, \mathcal{O}) に対する局所イデアルという. $W_{r,x}, 0 < r < 1 \in V|_{\Delta(0; r)}$ のこの同型写像による原像とする. 集合 $\{W_{r,x}\}$ は X の開近傍基となる. \mathcal{O}' を \mathcal{O} の像とする. これは V 上の連接解析層である. $\tilde{\mathcal{O}}'$ を \mathcal{O}' の $\Delta(0; r)$ へのトリビアルな接続とすると $\tilde{\mathcal{O}}'$ は $\mathcal{O}_{\Delta(0; r)}$ 加群の連接層だから基本定理 A, B がつかえる; 任意の $r < 1$ に対して, $\tilde{\mathcal{O}}'$ は有限表現をもつ. 即ち次のような $\mathcal{O}_{\Delta(0; r)}$ -加群の完全列が存在する:

$$(1) \quad 0 \longrightarrow \mathcal{O}_{\Delta(0; r)} \longrightarrow \mathcal{O}^q \xrightarrow{f} \tilde{\mathcal{O}}' \longrightarrow 0 \quad \text{on } \Delta(0; r).$$

従って任意の $r' \leq r$ に対して完全列

$$(2) \quad 0 \longrightarrow T(\Delta(0; r'), \mathcal{O}) \longrightarrow T(\Delta(0; r'), \mathcal{O}^q) \xrightarrow{\tilde{f}} T(\Delta(0; r'), \tilde{\mathcal{O}}') \longrightarrow 0$$

がえられる. 空間 $T(\Delta(0; r'), \mathcal{O}^q)$ は Fréchet 空間である (補題 1). \mathcal{O} は \mathcal{O}^q の部分層だから $T(\Delta(0; r'), \mathcal{O})$ は $T(\Delta(0; r'), \mathcal{O}^q)$ の閉部分空間となる (補題 2). 故に商位相を入れて

$$T(W_{r,x}, \mathcal{O}) \simeq T(V|_{\Delta(0; r)}, \tilde{\mathcal{O}}') \simeq T(\Delta(0; r), \tilde{\mathcal{O}}') \simeq \frac{T(\Delta(0; r), \mathcal{O}^q)}{T(\Delta(0; r), \mathcal{O})}$$

は Fréchet 空間となる. (1) の完全列が存在するよる $W_{r,x}$ の全体は, X の近傍基 $\mathcal{U} = \{U\}$ を与える. 故に $T(U, \mathcal{O})$ は Fréchet 空間となった. 明らかに制限写像は連続である. この位相は \mathcal{O} の表

現の与え方に無関係である。実際別な表現があったとする:

$$0 \rightarrow \Gamma(\Delta(0; r'), \mathcal{O}^{\delta'}) \rightarrow \Gamma(\Delta(0; r'), \mathcal{O}^{\delta}) \xrightarrow{\tilde{f}'} \Gamma(\Delta(0; r'), \tilde{\mathcal{F}}') \rightarrow 0$$

を対応する完全列とすると, $\Gamma(\Delta(0; r'), \mathcal{O}^{\delta})$ は $\Gamma(\Delta(0; r'), \mathcal{O})$ 上の自由加群だから $\Gamma(\Delta(0; r'), \mathcal{O})$ -線型写像

$$(3) \quad \gamma: \Gamma(\Delta(0; r'), \mathcal{O}^{\delta}) \rightarrow \Gamma(\Delta(0; r'), \mathcal{O}^{\delta'})$$

で $\tilde{f}' = \tilde{f}' \circ \gamma$ となるものがある。これは連続写像

$$\Gamma(\Delta(0; r'), \mathcal{O}^{\delta}) / \Gamma(\Delta(0; r'), \mathcal{O}) \xrightarrow{\psi} \Gamma(\Delta(0; r'), \mathcal{O}^{\delta'}) / \Gamma(\Delta(0; r'), \mathcal{O})$$

を定義おこし, これは全単射である。故に射影写像の定理から

ψ は位相写像となる。また, $\phi: \tilde{\mathcal{F}} \rightarrow \tilde{\mathcal{F}}'$ と層の準同型写像とし,

$\Delta(0; r)$ を \mathbb{C}^2 で, $\tilde{\mathcal{F}}', \tilde{\mathcal{F}}$ が共に有限表現があるような

多重円板とする: $\mathbb{R}P^3$ $\mathcal{O}_{\Delta(0; r)}$ -加群の層の完全列

$$\mathcal{O}_{\Delta(0; r)}^{\delta} \xrightarrow{f} \tilde{\mathcal{F}} \rightarrow 0, \quad \mathcal{O}_{\Delta(0; r)}^{\delta'} \xrightarrow{f'} \tilde{\mathcal{F}}' \rightarrow 0.$$

すなわち, (3) におけるように $\Gamma(\Delta(0; r'), \mathcal{O})$ -線型写像 ψ で次の

図が可換となるものがある:

$$\begin{array}{ccc} \Gamma(\Delta(0; r'), \mathcal{O}^{\delta}) & \xrightarrow{\gamma} & \Gamma(\Delta(0; r'), \mathcal{O}^{\delta'}) \\ \tilde{f} \downarrow & & \downarrow \tilde{f}' \\ \Gamma(\Delta(0; r'), \tilde{\mathcal{F}}) & \xrightarrow{\Gamma(\Delta(0; r'), \phi)} & \Gamma(\Delta(0; r'), \tilde{\mathcal{F}}') \end{array}$$

故に射影写像の定理から $\Gamma(\Delta(0; r'), \phi)$ の連続性がよる。定理証明終

さて, $(X, \mathcal{A}) \in$ 解析空間, \mathcal{F} を X 上の連接層とすると X の局所有限開部分空間 X_{ν} による被覆で, 各 ν に対して, $X_{\nu} \in \mathcal{A}$ である \mathbb{C}^n の局所多重円板 U_{ν} における開部分空間へ写す解析的同型写

像が存在し, しかも各 ν に対して, U 上の連接層系が有限な表現をもつように $X_\nu \in \mathcal{U}$ とすることが出来る. このとき各 $P(X_\nu, \mathcal{F})$ 上にはすでに Fréchet 空間の位相が入った. 次に自然な写射

$$\varphi: \Gamma(X, \mathcal{F}) \longrightarrow \prod_{\nu} P(X_\nu, \mathcal{F}|_{X_\nu})$$

を与える. Fréchet 空間の可算積として $\prod_{\nu} P(X_\nu, \mathcal{F}|_{X_\nu})$ は Fréchet 空間となる. $(g_\nu) \in \prod_{\nu} P(X_\nu, \mathcal{F}|_{X_\nu})$ に対して, $(g_\nu) \in \overline{\mathcal{I}_m \varphi}$ であるとは, 任意の $k \geq 0$ と任意の $x \in X_\lambda \cap X_\mu$ に対して, $\mathcal{I}_m \varphi$ の元 (f_ν) があって, $f_{\lambda x} - g_{\lambda x} \in m_x^k \mathcal{F}_x$, $f_{\mu x} - g_{\mu x} \in m_x^k \mathcal{F}_x$ をいみする. これは m_x は \mathcal{I}_x の極大イデアル, しかるに $f_{\lambda x} = f_{\mu x}$ だから $g_{\lambda x} - g_{\mu x} \in m_x^k \mathcal{F}_x$ である. これは任意の k に対して成り立つから Krull の定理より $g_{\lambda x} = g_{\mu x}$. このことは $(g_\nu) \in \mathcal{I}_m \varphi$ をいみする. 即ち上の自然な写射 φ で $\Gamma(X, \mathcal{F})$ の像は $\prod_{\nu} P(X_\nu, \mathcal{F}|_{X_\nu})$ の閉部分空間である. 故に $\Gamma(X, \mathcal{F})$ は Fréchet 空間となる. X' を X の任意の部分空間とすると, 制限写射 $r_{X'}: \Gamma(X, \mathcal{F}) \longrightarrow \Gamma(X', \mathcal{F})$ は明らかに連続となる. 故に次の系がえらゆべし.

系. 任意の部分集合 $W \subset X$ に対して, $\Gamma(W, \mathcal{F})$ は Fréchet 空間となる. 任意の部分集合 U, W , $U \subset W$ に対して制限写射 $r_{UW}: \Gamma(W, \mathcal{F}) \longrightarrow \Gamma(U, \mathcal{F})$ は連続である.

§3. 閉イデアルと昇算の定理

(X, \mathcal{F}) を解析空間とし, \mathcal{F} を X 上の連接層とする. 以下

$\Gamma(X, \mathcal{A})$ は Fréchet 空間とする. $A = \Gamma(X, \mathcal{A})$ とおき, 部分集合 $M \subset A$ に對して M によつて生成された Γ - \mathcal{A} の層を $\mathcal{A}M$ で表わす. この層 $\mathcal{A}M$ の茎を $\mathcal{A}_x M$ で表わす. 次の定理 2.3 及びその系は, X が \mathbb{C}^n の正則領域のとき Cartan [2] により与えられた.

定理 2. $\mathcal{A} \in A$ の Γ - \mathcal{A} とすると, \mathcal{A} は連接層である. (X, \mathcal{A}) が Stein 空間なら, $\Gamma(X, \mathcal{A})$ は A における \mathcal{A} の閉包 $\bar{\mathcal{A}}$ に等しい.

証明. \mathcal{A} の連接性は \mathcal{A} が局所有限生成的であることと示せば十分である. \mathcal{A} の生成元の数が有限なる問題は無い. ここで今, \mathcal{A} が一点 $x \in X$ で局所有限でなかったとする. $U \in \mathcal{A}$ の相対コンパクトな部分 V とすると, \mathcal{A} の元の列 f_1, f_2, \dots によつて生成された層 $\mathcal{A}V$ とすると, 各 V に対して, $\mathcal{A}V \subsetneq \mathcal{A}V + f_{k+1}U$ となるものがある. しかしに \mathcal{A} の連接部分層の族 $\{\mathcal{A}V\}$ はつねに局所的に停留的であるから (2) からこれは矛盾である. 故に \mathcal{A} は連接層となる. 次に $\Gamma(X, \mathcal{A})$ が A の閉集合であることを示す. それには定理 1 の系と同様に, 自然な単射 $\varphi: \Gamma(X, \mathcal{A}) \longrightarrow \prod \Gamma(X_\nu, \mathcal{A}|_{X_\nu})$ において $(g_\nu) \in \overline{\varphi \Gamma(X, \mathcal{A})}$ なら, 任意の $k \geq 0$ と任意の点 $x \in X_\lambda \cap X_\mu$ に対して, $(f_\nu) \in \varphi \Gamma(X, \mathcal{A})$ で, $f_{\lambda x} - f_{\mu x} \in m_x^k \mathcal{A}$, $f_{\mu x} - f_{\lambda x} \in m_x^k \mathcal{A}$ なるものが存在することに注意すればよい. 次に $\Gamma(X, \mathcal{A}) \subset \bar{\mathcal{A}}$ を示せばよいのだが, それには, 次の 2 つの補題 (証明は省略)

に注意すれば、あとは Cartan の証明が平行にゆく。その一つは \mathbb{C}^n における加群の局所閉性定理が (X, \mathcal{O}) に対して次の形で与えられることである。

補題 3. \mathcal{M} を解析空間 (X, \mathcal{O}) の 1 点 $a \in X$ における茎 $\mathcal{O}_a^{\mathcal{O}}$ の部分加群とする。 a のある近傍 V に対して、 $g \in \Gamma(X, \mathcal{O}^{\mathcal{O}})$ が $g|_V \in \Gamma(V, \mathcal{O}^{\mathcal{O}})$ の元で、点 a での芽が \mathcal{M} に属するもののみ、 $\Gamma(V, \mathcal{O}^{\mathcal{O}})$ における Fréchet 位相での極限になっているとすると $g_a \in \mathcal{M}$ 。

同様に多面体上の近似定理は次の形で与えられる。

補題 4 (Weil-Oka の近似定理). (X, \mathcal{O}) を Stein 空間、 $P \in X$ の Weil-Oka の多面体領域とすると、 \bar{P} での正則な関数は X で正則な関数によって $\Gamma(P, \mathcal{O})$ の Fréchet 位相で近似される。

系 1. (X, \mathcal{O}) を Stein 空間、 $\alpha \in \Gamma(X, \mathcal{O})$ の閉 Γ - \mathcal{P} とすると \mathcal{O} の連接 Γ - \mathcal{P} の層 \mathcal{M} で、 $\alpha = \Gamma(X, \mathcal{M})$ なるものがある。

実際 $\mathcal{M} = \mathcal{O}\alpha$ とおけばよい。

系 2. (X, \mathcal{O}) を Stein 空間、 \mathcal{M} を \mathcal{O} の連接 Γ - \mathcal{P} の層とすると $\mathcal{O}\Gamma(X, \mathcal{M}) = \mathcal{M}$ が成り立つ。従って $\Gamma(X, \mathcal{M})$ は $\Gamma(X, \mathcal{O})$ で閉じている、従って $\Gamma(X, \mathcal{M})$ は Fréchet 空間である。

証明. 前半は (X, \mathcal{O}) が Stein であるから明らか、故に定理 2 より $\overline{\Gamma(X, \mathcal{M})} = \Gamma(X, \mathcal{O}\Gamma(X, \mathcal{M})) = \Gamma(X, \mathcal{M})$ 。

系 3. (X, \mathcal{O}) を Stein 空間、 $\alpha \in A$ を閉 Γ - \mathcal{P} とすると、 α は少なくとも一つの共通零点をもつ。

証明. α にもし共通零点がなかったとすると $\mathcal{H}\alpha = \mathcal{H}$ となるが, α は閉イデアルだから $\alpha = P(X, \mathcal{H}\alpha) = P(X, \mathcal{H})$ となり矛盾.

系4. $(X, \mathcal{H}) \in \text{Stein}$ 空間とすると, A の任意の閉極大イデアル \mathcal{M} は唯一つの共通零点をもつ. それを a とおくと

$\mathcal{M} = \{f \in A \mid f(a) = 0\}$ と表わせる.

証明. 今 \mathcal{M} が2つの共通零点 a, b をもつたとする. A は X の点を分離するから, A の元で $f(a) \neq f(b)$ なるものがある.

$g(x) = f(x) - f(a)$ とおくとイデアル \mathcal{M} は固有イデアル $\{ \mathcal{M}, g \}$ を含まれることになり, \mathcal{M} の極大性に反す. 後半は明らか.

定理3. $(X, \mathcal{H}) \in \text{Stein}$ 空間とすると $P(X, \mathcal{H})$ の任意の有限生成イデアルは $P(X, \mathcal{H})$ で閉じている.

証明は補題3を使って, [2]に平行して, 一樣収束という所を Frechet 位相での収束におまかえることにより同様証明される.

定理4. $(X, \mathcal{H}) \in \text{Stein}$ 空間とする. $P(X, \mathcal{H})$ の極大イデアル \mathcal{M} は有限生成のとさらに閉イデアルである.

証明. 定理3より十分性は明らか. 今 \mathcal{M} が閉であるとすると定理2系4より唯一つの点 $a \in X$ で, $\mathcal{M} = \{f \in P(X, \mathcal{H}) \mid f(a) = 0\}$ となるものがある. 定理2より層 $\mathcal{H}_{\mathcal{M}}$ は連接 D から有限個の元 $f_1, \dots, f_r \in P(X, \mathcal{H})$ で, \mathcal{H}_a と $\mathcal{H}_a \mathcal{M}$ を生成するものがある. 集合 $X' = \{x \in X \mid f_1(x) = \dots = f_r(x) = 0\}$ は $X' = X_0 \cup \{a\}$ とかける. $\mathcal{M} =$

に X_0 は a を含まない (空かとも知れない) 解析集合である. 他方 $f|_{X_0} = 0$, $g(a) = 1$ なる関数 $g \in \mathcal{F}(X, \mathcal{A})$ が存在する. したがって $f_0 = g - 1$ は \mathcal{M} に属し, (f_0, f_1, \dots, f_k) は唯一つの交通零点を成す. 故に定理 B より関数 f_0, f_1, \dots, f_k は $\mathcal{F}(X, \mathcal{A})$ の \mathcal{M} を生成する.

定理 5 (井草 [9]). (X, \mathcal{A}) を Stein 空間, $\mathcal{M} \in \mathcal{F}(X, \mathcal{A})$ の極大イデアル \mathcal{P} とすると次の条件は同値である.

(1) $\mathcal{F}(X, \mathcal{A})/\mathcal{M} \cong \mathbb{C}$ (位相環として同型)

(2) \mathcal{M} は $\mathcal{F}(X, \mathcal{A})$ の閉極大イデアル.

(3) $\mathcal{M} = \{f \in \mathcal{F}(X, \mathcal{A}) \mid f(a) = 0\}$ なる点 a が存在する.

証明. (1) \rightarrow (2). $\mathcal{M} \subsetneq I \subseteq \mathcal{F}(X, \mathcal{A})$ なるイデアル I があるとする. 関数 $f \in I$ と定数 $c \in \mathbb{C}$ で $f \notin \mathcal{M}$, $f - c \in \mathcal{M} \subset I$ なるものがある. したがって $0 \neq c \in I$ であり $\mathcal{F}(X, \mathcal{A}) = I$ となる. 故に \mathcal{M} は極大イデアルである. 他方位相環 \mathbb{C} は Hausdorff であるから空間 \mathcal{M} は $\mathcal{F}(X, \mathcal{A})$ で閉じているから存在する [1].

(2) \rightarrow (3) は定理 2 系 3. (3) \rightarrow (1) は明らか.

§ 4. スペクトル論

定義 4. Stein algebra A のスペクトル $S(A)$ とは, 位相環 A から, 位相環 \mathbb{C} の上への次のような自位相環 \mathbb{C} への複素線形同型写像の集合をいう: 元 $\phi \in S(A)$ の近傍基を次のように定める.

$$V(\phi, \varepsilon) = \{\gamma \in S(A) \mid |\phi(f) - \gamma(f)| < \varepsilon, f \in A, \varepsilon > 0\}.$$

定理5' (井草). $(X, \mathcal{R}) \in \text{Stein}$ 空間とし, $A = P(X, \mathcal{R})$ とおく. このとき標準字像 $\alpha: X \longrightarrow S(A)$, $\alpha(u) = \phi_u$, $\phi_u(f) = f(u)$, $f \in A$ が出来るがこの α は位相字像である[5].

証明. まず \mathcal{R} の被約構造層 \mathcal{Q} を考える. (X, \mathcal{R}) を任意の解析空間とし, \mathcal{R}_x を \mathcal{R}_x の中環元全体よりなる \mathbb{C} - \mathcal{R}_x とする.

$\mathcal{R} = \bigcup_{x \in X} \mathcal{R}_x$ は連接層となる. 何故ならば局所として (V, \mathcal{R}') において, $\mathcal{R} = \mathcal{R}'/\mathcal{I}$ となるからである. ここで \mathcal{I} は V 上 0 になる関数層の層, \mathcal{I} は (V, \mathcal{R}') を定める \mathbb{C} - \mathcal{R}' の層である.

(X, \mathcal{R}) の被約解析空間 (X, \mathcal{Q}) と, $\mathcal{Q} = \mathcal{R}/\mathcal{R}$ で定める. $A_r = P(X, \mathcal{Q})$ とおくと, 自然な全射準同型 $\rho: A \longrightarrow A_r$ が出来る. $\mathcal{R} = \ker \rho$ とおくと $\mathcal{R} = \{f \in P(X, \mathcal{R}), f(u) = 0, \forall x \in X\}$ とかける.

補題5. \mathcal{R} は A の Jacobson 根基に含まれる.

証明. そうでなかったと仮定し, 最大の \mathbb{C} - \mathcal{R} \mathcal{m} をとって, $\mathcal{m} + \mathcal{R} = A$ とする. 従って, $g \in \mathcal{m}$, $f \in \mathcal{R}$ で $g + f = 1$ なるものがある. f_x は各点 $x \in X$ で中環元だから, 近傍 U と自然数 $N(U)$ がすべての $n \geq N(U)$ に対して $f^n|_U = 0$ となるものがある. 故に列 $\{f^n\}$ は A で 0 に収束する. 故に $g = 1 - f$ は逆元 $\sum_{n=0}^{\infty} f^n$ を持つことになり $1 \in \mathcal{m}$ となりこれは矛盾である.

さて準同型 $\phi: A \longrightarrow \mathbb{C}$, $\phi \in S(A)$ が与えられたとす. $\ker \phi$ は A の最大の \mathbb{C} - \mathcal{R} だから補題5より ϕ は $A \xrightarrow{f} A_r \xrightarrow{\rho} \mathbb{C}$ と分解出来る. ここには全射だから開字像の定理により,

ϕ は連続である。故に $S(A) = S(A_r)$ となる。故に証明は S 空間の空間 (X, \mathcal{O}) の場合に帰着した。以下 [10] と同じである。証終。

注. Stein algebra A に対して, A の閉極大イデアルの集合を $M(A)$ とおくと, $M(A) = \{ \text{Ker } \phi \mid \phi \in S(A) \}$ となる. (X, \mathcal{O}) が Stein 空間で $A = P(X, \mathcal{O})$ なる $S(A)$ と $M(A)$ との間には 1対1 の対応がある. 逆に任意に与えられた Stein algebra のスペクトル $S(A)$ から $S(A)$ 上の環の層 \tilde{A} を定めて, $(S(A), \tilde{A})$ を解析空間の構造を入れることが出来る. Forster [6] は次のことを証明した.

定理 6. A を Stein algebra とし, Stein 空間 (X, \mathcal{O}) の切断 $P(X, \mathcal{O})$ に同型とすると, (X, \mathcal{O}) と $(S(A), \tilde{A})$ は双正則同型である.

§5. Stein 加群

(X, \mathcal{O}) を解析空間, \mathcal{M} を \mathcal{O} -加群の層とすると, $P(X, \mathcal{M})$ は位相 $P(X, \mathcal{O})$ -加群となる.

定義 5. Stein algebra A 上の位相加群 M は, Stein 空間 (X, \mathcal{O}) と連続 \mathcal{O} -加群の層 \mathcal{M} と位相環及び位相加群としての同型写像 $\varphi: A \rightarrow P(X, \mathcal{O})$, $\gamma: M \rightarrow P(X, \mathcal{M})$ があって, すべての $f \in A$, $m \in M$ に対して $\psi(fm) = \varphi(f) \gamma(m)$ 存在と互, M を Stein 加群という.

定理 2 及びその系の証明と同じ方法で次のことが示される.

定理 7. $(X, \mathcal{O}) \in$ 解析空間, $\mathcal{M} \in$ 連接層とする. $M \in \mathcal{P}(X, \mathcal{M})$ の部分集合とすると \mathcal{M} の部分層 $\mathcal{M}|_M$ は連接層である. (X, \mathcal{O}) が Stein 空間で, M が $\mathcal{P}(X, \mathcal{M})$ の部分群なら $\mathcal{P}(X, \mathcal{M}|_M)$ は M の閉包 \bar{M} に等しい.

系 1. $(X, \mathcal{O}) \in$ Stein 空間, $\mathcal{M} \in$ 連接層とする. \mathcal{M} の任意の連接部分層 \mathcal{N} に対して, $\mathcal{P}(X, \mathcal{N})$ は $\mathcal{P}(X, \mathcal{M})$ で閉じている.

系 2. Stein 加群 M の部分加群 N は, N が Stein 加群であると \bar{M} に限り閉じている.

さて, $(X, \mathcal{O}) \in$ 解析空間, $\mathcal{M}, \mathcal{N} \in X$ 上の連接層とすると任意の開集合 $U \subset X$ に対して, $\mathcal{P}(U, \mathcal{M}), \mathcal{P}(U, \mathcal{N})$ は Fréchet 空間であった. 任意の層の準同型写像 $\phi: \mathcal{M} \rightarrow \mathcal{N}$ に対して, ϕ を誘起する写像: $\mathcal{P}(U, \phi): \mathcal{P}(U, \mathcal{M}) \rightarrow \mathcal{P}(U, \mathcal{N})$ は連続である. Forster (7) は次のことを証明した.

定理 8. $(X, \mathcal{O}) \in$ Stein 空間, $\mathcal{M}, \mathcal{N} \in X$ 上の連接層とする. $A = \mathcal{P}(X, \mathcal{O}), M = \mathcal{P}(X, \mathcal{M}), N = \mathcal{P}(X, \mathcal{N})$ とおく. 任意の A -線型写像 $\phi: M \rightarrow N$ に対して, $\phi = \mathcal{P}(X, \psi)$ なる \mathcal{M} 準同型写像 $\psi: \mathcal{M} \rightarrow \mathcal{N}$ が唯一存在する.

系 1. 上の定理と同じ仮定の下で, 任意の A -線型写像 ϕ は連続であり, $\text{Im } \phi$ は N で閉じている.

証明. 上の定理より \mathcal{M} 準同型写像 $\psi: \mathcal{M} \rightarrow \mathcal{N}$ で $\phi = \mathcal{P}(X, \psi)$ なるものがあるから, ϕ は連続である. 他方定理 B から,

$\phi(M) = T(X, \tau(\mathcal{M})) \subset T(X, \mathcal{R}) = N$ で、 $\tau(\mathcal{M})$ は \mathcal{R} の連接部分層だから、定理 7 系 1 により、 $\phi(M)$ は N で閉じている。

系 2. (拡張された計算の定理). Stein algebra A 上の任意の Stein 加群 M, N に対して、任意の代数的同型写像 $\phi: M \rightarrow N$ は位相同型写像である。

さて、 A は任意の環とし、 $M \in A$ -加群とするとイテパ化の原理により、 M は環 $A' = A \oplus M$ のイテパ化と存在。次の定理 [7] は Stein 空間 (X, \mathcal{R}) の構造層 \mathcal{R} が 1 つの X において、十分沢山あることを示している。

定理 9. (X, \mathcal{R}) を解析空間、 $\mathcal{M} \in \mathcal{R}$ -加群の連接層とする。層 $\mathcal{R}' = \mathcal{R} \oplus \mathcal{M} \in \mathcal{R}'_2 = \mathcal{R}_2 \oplus \mathcal{M}_2$ で定めると付環空間 (X, \mathcal{R}') は解析空間となる。 (X, \mathcal{R}) が Stein 空間ならば、 (X, \mathcal{R}') も Stein 空間である。

この定理を便之に加群に内する定理はイテパ化に内する定理に還元される。故に定理 3 から次の定理がえられた。

定理 3'. (X, \mathcal{R}) を Stein 空間、 $\mathcal{M} \in X$ 上の連接層とする。 $\mathcal{F}(X, \mathcal{M})$ の任意の有限生成 $\mathcal{F}(X, \mathcal{R})$ -部分加群は $\mathcal{F}(X, \mathcal{M})$ で閉じている。

References

- [1] N.Bourbaki, Topologie générale, Chap.3, Herman, 1960.
- [2] H.Cartan, Idéaux et modules de fonctions analytiques de variables complexes, Bull.Soc.math.France, 78(1950), 29-64.
- [3] _____, Séminaire, E.N.S, 1951/52.
- [4] _____, Séminaire, E.N.S, 1953/54.
- [5] O.Forster, Primärzerlegung in Steinschen Algebren, Math. Ann. 154(1964), 307-329.
- [6] _____, Uniqueness of topology in Stein algebras, Function Algebras, Proc. Intern. Symposium, Tulane, 1965.
- [7] _____, Zur Theorie der Steinschen Algebren und Modulen, Math. Z. 97(1967), 375-405.
- [8] H.Grauert, Ein Theorem der analytischen Garbentheorie und die Modulräume komplexer Strukturen, I.H.E.S. No.5, Paris, 1960.
- [9] J.Igusa, On a property of the domain of regularity, Mem. Coll. Sc. Univ. Kyoto, 27(1952), 95-97.
- [10] R.Iwahashi, A characterization of holomorphically complete spaces, Proc. Japan Acad, 36(1960), 205-206.
- [11] J.P.Serre, Géométrie algébrique et géométrie analytique, Ann. Inst. Fourier, 6(1960), 1-42.
- [12] _____, Prolongement de faisceaux analytiques cohérents, Ann. Inst. Fourier, 16(1966), 363-374.